

目的意識をもち、夢中になって探究し続ける子どもの育成

1 はじめに

昨年度は、学校の最上位目標「夢中になれるものを見つけよう！自分からDo!」の基、生活科・サカエルタイム（総合的な学習の時間）を核として、「目的意識をもって夢中になって探究し続ける子ども」を育てるべく、心のエンジンに火をつけ、絶やすことなく灯し続けることと、目的意識がもてるようにすることを重点に、研究を進めた。

心のエンジンに火をつけ、灯し続ける工夫は、一昨年から継続している重点事項である。昨年度は、探究場面で外部人材の活用を充実させたり、プロジェクト中間報告会を設定して探究の方向性や内容を修正させたりすることにより、子どもの「もっと知りたい、調べたい」という心のエンジンに火を灯し続けることができた。子どもの夢中に取り組む態度が育ってきたとともに、教師も支援するタイミングや方法、環境整備の在り方について、徐々にコツをつかむことができてきた。成果を継承し、今年度も「目的意識をもって夢中になって探究し続ける子ども」の育成の土台としていきたい。

目的意識をもつことができるようにするための工夫では、子どもの発達段階に応じた支援や環境整備の結果、プロジェクトのゴールに対して「何のために」という目的意識を向けて取り組む子どもの姿が見られた。さらに詳しく子どもの様子を分析すると、子どもが目的をもつ場面やタイミングが、発達段階や探究する対象（課題）によって異なるということが少し見えてきた。そのため、引き続き研究の重点として取り組み、子どもに合わせた支援の方法を研究し、深めていくことには意義があると考えます。

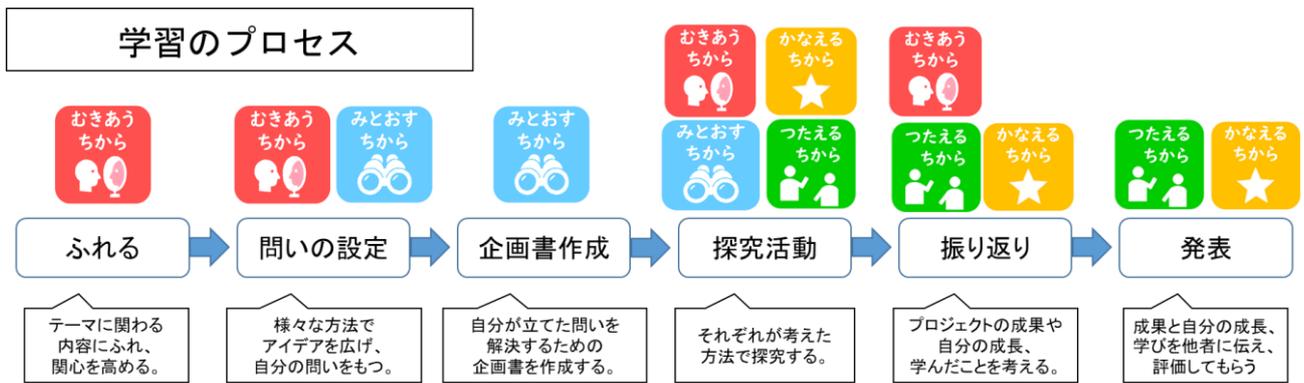
一方、探究場面で他者のアドバイスを素直に受け入れることができず、独りよがりになってしまう子どもが見られた。これは、「夢中になること」の意味を履き違えてしまい、「自分のプロジェクトなのだから、自分だけで決めればよい」という偏った発想にとらわれてしまったためであると考えます。「ナゴヤ学びのコンパス」では、実現したい市民の姿として、「誰もが、互いの自由を認め合い、共に社会を創造する」ことが示されている。自分も他者も全ての人を尊重する態度（自由の相互承認）を土台に、「夢中になって探究し続ける」姿を期待したい。

そこで、今年度は、心のエンジンに火をつけ、灯し続けることを大切にしながら、目的意識をもつことができるようにするための支援と、夢中になって探究するための土台となる自分も周りも大切にすることを育む支援に重点をおいて研究に取り組む。

2 基本的な考え

(1) 学びに向かう力と学習のプロセスについて

子どもが夢中になって探究に取り組む、力を伸ばすことができるようにするために、昨年度に引き続き、学びに向かう4つの力（別紙参照）を設定し、以下のプロセスで学習を展開しながら研究に取り組む。



(2) 本年度研究の重点について

子どもが夢中になって探究に取り組むことができるようにするために、心のエンジンに火をつけ、灯し続ける支援や環境整備を土台に、以下の点に重点をおいて研究に取り組む。

- 目的意識をもつことができるように支援する。
- 自分も周りも大切にすることを育むことができるように支援する。



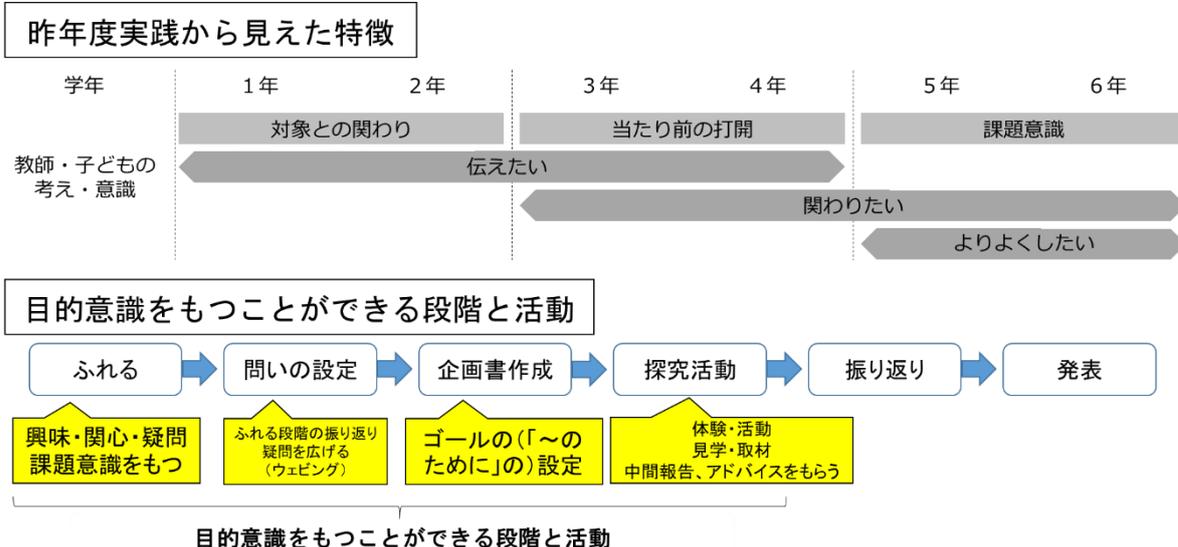
3 研究の手立て

(1) 目的意識をもつことができるようにする支援・環境整備

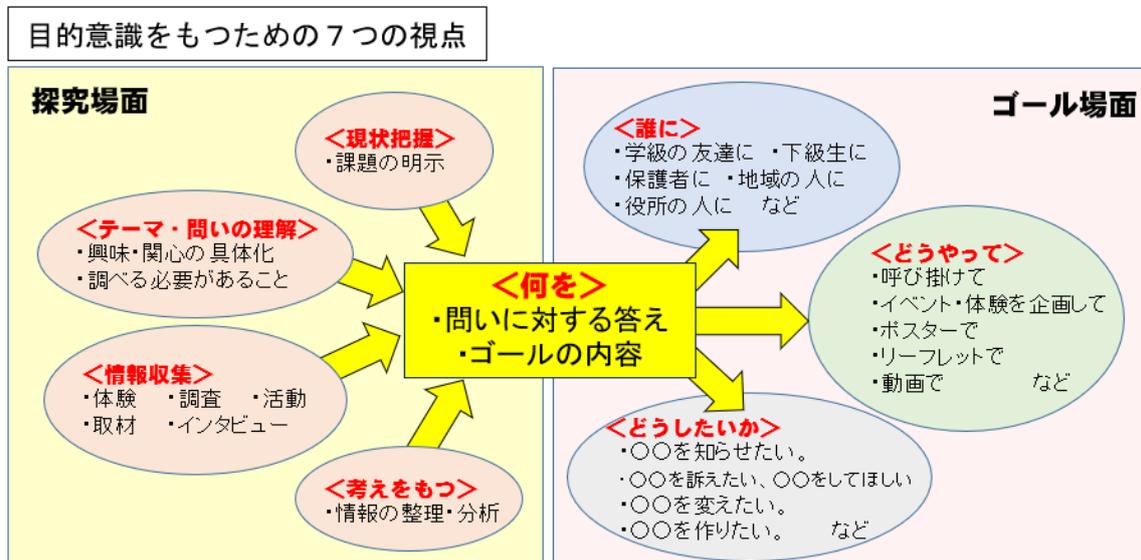
昨年度の実践から、発達段階や探究する対象(課題)によって目的意識のもち方やタイミングが異なるということが見えてきた。低学年は、学習の中ではじめて出会う(知る)ものやことが多い。そのため、対象とじっくり関わりながら夢中に取り組む態度や「誰かに伝えたい」という思いを醸成していくところに特徴がある。中学年は、学校生活に慣れ、視野がやや広くなることから子どもの「知っている」が増える。そのため、子どもの中の「知っている」を打開すべく、本物との出会いや実際にやってみる経験が子どもを夢中にさせるとともに、新たな気づきを得ることによって、「誰かに伝えたい」「もっと関わりたい」という思いを醸成していくところに特徴がある。高学年は、見通して思考する力が高まり、事象から課題意識を見出すことができるようになってくる。そのため、ふれる段階で課題に出会わせたり、プロジェクトの途中で報告会を開いてプロジェクトを見返したりしながら、自分なりの問いに対する答えや表現を考えようとする態度を醸成していくところに特徴がある。これらは、昨年度の実践から見えてきたいわば仮説であり、検証するには更なる実践の蓄積が必要であると考えられる。

そこで、今年度は、昨年度の成果を生かしつつ、発達段階に合わせた支援の方法とタイミングを工夫し、どのように支援すると子どもが目的意識をもつことができるのかを研究する。はじめての出会いから対象とじっくり関わる低学年は、単年の後半に「誰

かに伝えたい」という思いをもつようになるかもしれない。「知っている」を打開した中学年は、企画書作成の段階で「誰かに伝えたい」「もっと関わりたい」というようなゴールを設定するかもしれない。事象から課題意識をもつことができる高学年は、自分なりの問いに対する答えや表現を考え続けるかもしれない。いつ、どのような支援を行うことが子どもの目的意識をもつことに有効かという視点で、学年の発達段階に応じた手立てを研究する。



以下に示したのは、目的意識をもってプロジェクトに取り組むために、子どもが意識して取り組むとよい7つの視点をモデル化したものである。声掛けや掲示など支援方法を工夫する際のモデルにしたい。



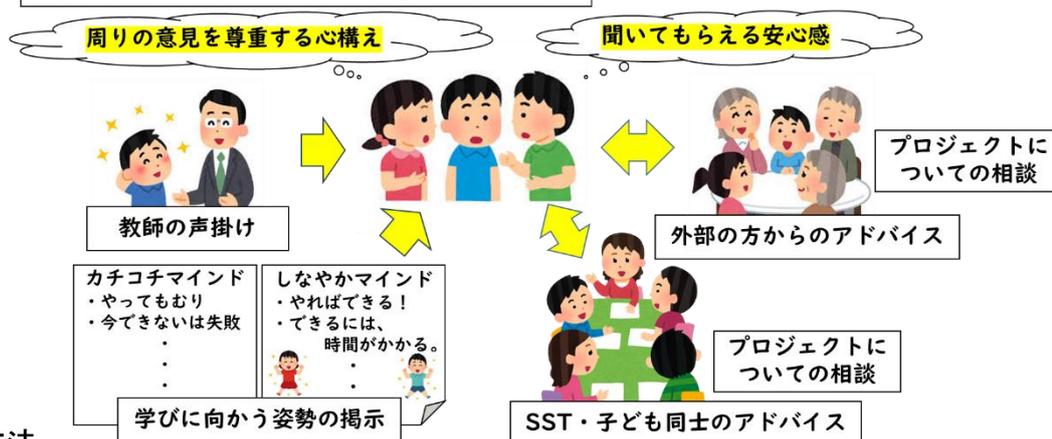
(2) 自分も周りも大切にできる態度を育む支援

自分も周りも大切にできる態度を育むためには、自分の意見を聞いてもらえるという安心感と、子どもが周りの意見を尊重しようとする心構えが必要であると考えます。これらは、切り分けて考えるものではなく、相互に高まっていくものであると考えます。

そこで、話を聞くときの態度やアドバイスをもらってよりよいものを作っていく心構え、周りからの指摘をポジティブに受け取る心構えなどを、子どもの発達段階に応じた工夫しながら伝えるようにする。伝えるときは、口頭で指導することも必要ではあるが、掲示物を作成して環境を整えたり、ソーシャルスキルトレーニング（SST）を取

り入れて相手の気持ちを想像する力を鍛えたりする方法も考えられる。また、よりよくしようと工夫している子どもを取り上げて紹介し合ったり、アドバイスし合ったり、困っている子どもを他のグループの子どもとつないで解決を促したりする支援を行うことや、プロジェクトの途中で中間報告会を行い、互いのプロジェクト内容を紹介し合ったり、保護者や外部の方から評価をもらったりする場を設定するような工夫も考えられる。夢中になって探究する子どもの土台づくりの方法を試行錯誤しながら研究していく。周りを大切にする態度は、一朝一夕に育つものではない。時間を掛けてじっくり育みたい。

自分も周りも大切にすることを育む支援



4 研究の方法

(1) 推進の方法

- 低学年、中学年、高学年の三部会に分かれて研究に取り組む。
- 一人1回以上、校内にて公開授業を行う。公開場面は、部会内で重ならないように調整できるとよい。
- 公開授業に際し、事前・事後に子どもの様子を共有するとともに、支援や環境整備の方法について意見を交わす。
- 各学年、以下のものを作成する。(作成したものは、HPに掲載する。)
 - ・ 授業デザインシート：単元目標と実践計画を記したシート
(A4表裏1枚程度)
- ※ 1学期に公開授業を行う学年を除き、8月中には作成し、推進委員長に提出する。
- ・ 最終報告書：各段階における活動の様子と実践の振り返りを記したシート
(A4表裏1枚)